

ジャン—ジャック・ルソーの『エミール』 における自然的男女不平等観と女性教育論

小 沼 和
佐 藤 良 吉

1. 自然的男女不平等観と女性教育の意義

ルソーの女性教育の教育観は男女の身体と精神は同じではなく、又同じであってはならないとの男女不平等の見解に立脚している。したがって、男女両性の教育が同じものであってはならないと、独自の女性教育観のもとに、その女性教育論を展開している。

また、彼はこの男女の不平等は自然の摂理であって、決して人為的、社会的な所産ではないとの自然的不平等の認識のうえに、男女が自然の示す方向にしたがって協力するための自然的な女性教育論を、性の自然性の尊重を中心に次のように述べている。「男性と女性が、性格の点でも、体質の点でも同じようには成り立っていないし、またそうなるべきものではないということがひとたび明らかになった以上、当然、両者は同じ教育を受けなくてはならないという帰結になる。自然の示すところに従えば、両性は相互に協力して行動しなければならないが、同じことをしてはならないのである。仕事の目的とするところは共通である。が、仕事そのものは違っている。したがって仕事を進める流儀も異なっている。自然の男性を作り上げる努力をしたあと、わたしたちの仕事が半端なものにしておかないために、この男性にふさわしい女性がどんなふうにも作り上げられなければならない

かを見るとしよう。」(5篇 p397)

ルソーの男女論は究極において、男女両性は身体的にも精神的にも対等ないし同質ではなく、男女の差異を自然的に不平等すなわち男女の自然的本質的独自性、として認識している。しかし、この男女論は封建的な男尊女卑の思想と誤解されやすく、また、男女の人間としての平等を中心理念とする彼の思想と矛盾するかのように理解されることがあるが、そうではない。彼の自然的に不平等の男女論は人間の男女を平等、不平等という次元をはるかに超越した自然の原理に基づく人間理解であり、彼の思想の中核をなすものである。

ルソーの鋭い感情はたえず自分自身を見つめ観察しては、自己認識を深め自己の人間的変容の本質の再認識に努めている。「わたしひとり。わたしは自分の心を感じている。そして人々を知っている。わたしは自分の見た人々の誰ともおなじようには作られていない。現在のいかなる人ともおなじように作られていないとあえて信じている。」(『告白』第1巻 p.10)と述べているように、彼にとって自分の理解者は自分であり、自分は自分にとって最高の関心でありすべてである。したがって、自己認識と自己批判は誠に厳しいものがある。彼の最高の関心であるその自分が自分と同じように関心を示したものは人間であり、なかでも女性である。彼の独自の女性の観察とその認識は、身体的、精神的、社会的な生活の実相などを、広汎な分野からの深い思索によって、男と女は自然的に不平等であるとの結論を導きだしている。そして、彼は男女ともに人間であり自然物であることと、男女の結合による社会的な生活の複雑微妙な営みとの両面の考察から、男女観として人間的平等よりは、自然的男女不平等を自然の原理として確認し、彼の男女観を確立しているのである。そして、彼のこの自然的男女不平等観は彼の教育観の基盤となって、全人的女性教育論を成立させたのである。

この自然的に不平等の男女観とその教育論は、彼の『エミール』の第5篇の男女論についての見解を概観することによって、いつそう明らかになる。

「性に関係しないいっさいのものにおいては、女性はすなわち男性である。女性も同じ諸器官と、同じ欲求と、同じ能力を持っている。諸器官の構成も同じ仕組みであり、その各部も同じ、身体の動きもお互いに同じ、外形も相似ている。そして、ある点から両者を考察すれば、両者のあいだのちがいは多少の程度の差にすぎない」(p.391) 彼は男女の身体を解剖学の立場で考察して、その類似点と相違点について「両者が共通に有しているものはすべて人間という種に属するものであり、両者が相異なっているものはすべて性に属しているということである。」(p.391) と両者の類似点は人間としての種であり、相違点は相異なった性であることを指摘している。そして、「わたしたちは両者のあいだに実に多くの類似点と実に多くの相違点を見出すので、かくも相違した器官構成を備えさせながらかくも相似た二個の存在を創り出したことは、おそらく、自然の驚異の一つであろう。」(p.392) と述べていることは、ルソーが種と性の観点から男女を考察して、両者のあいだに多くの類似点と相違点を見出し、かくも相違した器官構成でありながら、かくも相似た二個の存在を創り出したことは自然の驚異であり、自然の神秘性はすなわち男女の存在の神秘性であると、彼自らの自然崇拜の思想が男女の自然性とその人間形成作用に対する畏敬となっている。このルソーの男女観は男女両性の中で独自の個性と人生が創造されるものであることの洞察であり、彼の教育観の基盤を成すものである。

ルソーのこの自然観は人間観を確立し、両者の関係から人間を自然物として、認識した思想は実に新鮮である。男女の平等よりはその差異、すなわち両性の本質的特徴に注目して、自然の神秘性に深く感じ、目に見えるものよりは、男女の目に見えない内面に着目したことは、彼の尽きることのない人間に対する愛情であり男女両性への関心である。「こうした類似と相違とは、精神に影響を与えずにはおかない。その帰結はおのずから眼に見えたもので、経験的にも確認され、両性の優劣と平等について論議をたたかわすことの共通点においては、両者は平等である。両者の相違点に

おいては、両者は比較し得ないものである。完全な女性と完全な男性とは、顔よりも精神においていっそう似るはずのないものである。」(p.392) 彼の男女観は男女存在を自然の驚異であるとの感動的理解に始まることから両者を優劣と平等で理解しようなどとは全く考えていない。それどころかそのような発想で男女を理解しようとするならば、そのこと自体虚偽であると断じている。したがって、初じめからその本質を見失ない間違った結論を導き出すような愚かなことはすべきでないと警告している。だからこそ、男女を優劣と平等といった発想で理解しようとすることは、自然への冒瀆であると、自然の創造する人間の尊厳に対する虚偽の認識があるということ自体に恐怖の念をいだいている。

まして、両性の類似性と相違性とが結合して男女は新しい精神（人格）の形成をなしとげるのであるから、教育は男女それぞれの精神を理解することなしには始まらないのである。だからこそ彼は男女にふさわしい精神（人格）の形成に資する教育とはどのような教育でなければならないかを思索する根源を自然的男女不平等に求めたのである。したがって、ルソーは男女論において、優劣論ないし平等論は虚偽の結論を導き出すのみならず、人間観の本質である男女の認識を狂わせるものであるから、その議論のむなしさを指摘し「完全な女と完全な男は顔よりも精神において似るはずはない」と、自然の創造物である男女の精神（人格）に畏敬して、自然的男女不平等を男女観の根本理念としている。

以上の人間理解の観点と認識から彼の教育は、この自然的男女不平等観に基づいて男性と女性の教育のあり方の違い、特に女性の教育について詳細かつ具体的に『エミール』の第5篇で論述しているのである。

ルソーは男女それぞれの天与の特性を自然の原理にしたがって生かし完成させる教育を一貫して追究し思索している。そして、その教育観の確立にあたって、既成の教育の実際とその理論から自らを解放して、自由な立場で、現下の教育を人間に関するすべての社会と文明との関係で観察し批

判し考察することによって、発想の転換をはかり、独自の自然的人間観に基づく自然的教育観を今日的時代の思想を越えて形成したのである。したがって、彼は自然本性による自然本性の教育の正しいことを既成の教育批判によって論証するよりは、自然そのものに即して、自らの教育観を確立したのである。このことについて、押村襄はその著『教育観の転換—ルソーの観点から—』において次のように述べている。「『エミール』の著しい特色は、この書が新しい教育理論を積極的に創造しようとしているのではなく、それよりはむしろ文明社会の教育を最も広義に捉えて、それを自由に、根本的に批判しようとしている点にある。著者は、従って、教育の為すべきことよりはその為すべからざることを、教育の善よりはその罪悪を、さらに、教育の必要よりはその無用をさえ、いっそう強調しているように思われる。」(P.234)との押村襄氏の見解は、ルソーの教育観が自然の原理に根ざすがゆえに自由で宏大であることを指摘している。たしかに文明社会の教育の矛盾が人間を不幸にしているとのルソーの社会と教育に対する批判は、人間社会の教育に対して自然の教育を、他人のための教育に対して自分自身のための教育を、さらに、市民を作る教育に対して人間を作る教育を一つに統合して、文明社会の人間の矛盾的性格を救済しようと意図しているのである。

ルソーの自然本性に基づく人間観とその教育観が、文明社会の人間の矛盾的性格を救済するところにあるならば、それは男女の結合と協力から始まることになる。このことについてルソーは「自然の示すところに従えば、両性は相互に協力して行動しなければならないが、同じことをしてはならないのである。仕事の目的とするところは共通である。が、仕事そのものは違っている。したがって、仕事を進める流儀も異なっている。」と述べていることから、男性と女性は相互に協力して行動することが、自然の原理であり、先天的に決められているのである。したがって、男女は協同して生活を営み、共通の目的である新しい生命の誕生とその生命に精神を

養い、人間としての男性と女性へと教育しなければならない。そのためには、男女それぞれが、自己を最高に生かし合って、男女の身体的、精神的な自然本性の差異に基づく趣味や仕事の相違を、男女の結合による精神的理解で、共通の目的に向って生かし合って昇華させる協力が必要である。だから男性と女性はそれぞれの特性でその役割を遂行しなければ自然の原理に反することになる。そこでルソーの教育論は、両性の教育の関係とその対照のうえに、男女それぞれの特性を生かす教育が構想されている。

「自然の男性を作り上げる努力をしたあと、わたしたちの仕事を半端なものにしておかないために、この男性にふさわしい女性がどんなふうに取り上げられなければならないかも見るとしよう。」(P.398)と、自然の男性を作りあげる教育、すなわち男性の人格形成のための教育観とその方法の確立のうえに、十全の教育で自然の男性の育成に努力して予想どおりの成果をあげたとしても、その教育が完全なものとなるはずはないのであるから、男性の教育は、女性教育との関係と対照のうえに、あらためて女性の理解と尊重が再考されなければならない。つまり教育は男性の教育と女性の教育から両者の教育のあり方が総合的に究明されて、人間教育となるのである。

したがって、男性の教育の完成はその教育にのみあるのではなくて、「男性にふさわしい女性がどんなふうに取り上げられなければならないか」の女性の教育が男性の教育の鍵を握っているのである。すなわち、男性の教育の完成は男性にふさわしい女性の教育の確立なくしては成立し得ないのである。つまり、両者の教育は相対的、総合的に考えられなければ、教育とはならないことをルソーは確信し、女性の教育はいかにあるべきかを、彼独自の自然的不平等の女性観に立って、男性は女性の特徴を、女性は男性の特徴をそれぞれが自分には絶対に存在しない貴重なものとして、尊重することによって理解すべきであると、男女相互の理解の基本的あり方を示し、この理解の深化こそ教育の基礎基本であるとしている。そして、

男女の自然物としての絶対的実存とその意義について、ルソーは、「性の特徴となっているものはすべて、自然によって確立されたものとして尊重しなければならない。」(P.398)と述べている。ルソーのこの男女観は男女の性の差異が自然によって確立されたもので、人間の生命の永遠を保障するための絶対的実存であるとしている。だからこそ男女の差異を自然的不平等でなければならないと認識しているのである。そして、この自然的不平等こそが、人間として男女はお互の人間性とその特徴を両者の協力によって理解するとともに、尊重しなければならない根拠としているのである。もしもそうではなく男女の性の特徴がすべて同一平等であったとしたら、男女の存在は自然物として無意味なものとなって、何の創造もなく自滅してしまうのである。男女の自然的不平等は男女の生存と生活のすべてに渡って補完の関係であり、相互依存であり、そして一致協力しなければならない存在であるから、当然、男女は自然的不平等として永遠に存在し続けるのである。すなわち男女の特徴は異なっているからこそ自然の原理に即し、自然本性による繁栄を保持するのである。

ルソーの不平等観は、男女の結合による家庭生活を何物にもとらわれることなく、自由な感性と平凡な日常的生活態度で、より自然にそして素直に見つめ観察した帰結である。彼は男女が生活を伴にして協同する営みに誰れよりも驚異と感動を覚えその実態を自らが体験し、そして自分の目で確認したがゆえに、理性的で観念的な見解からの男女の社会的、人為的平等観に対して、彼の鋭い感情は嫌悪と違和感を感じ、その平等観の虚偽を見破って、その本質は自然的不平等であることを明らかにするとともに、男と女を自然へと解放したのである。だから、彼の男女観は男女の優劣を論ずることなく、また、彼の感情は男女の特徴による協力関係がその生活を創造するに当って、相剋と葛藤が織りなす多様な現象と、男女の人間的成長と変容に新鮮な生命力を感じている。このことが人間の再発見となり同時に自然の原理すなわち、人間存在の男女の不平等の再認識となって、

人間に対する理解をいっそう深めていったのである。そして、彼は男女の織りなす生活をより豊かなものにと願って、彼独自の自然を原理とする教育観を自らの生活経験と融合させながら樹立したのである。

ルソーの自然的男女不平等観の男女論は、男女の結合を両性の協力による人間の無限の可能性の追求であることを明かにしている。男性と女性の差異は男女の関係において、未知なるものへの感動と驚異の源泉である。男性と女性が異性である相手との関係で、愛情と憎悪の感情的世界を創造し、そして相手を知ることが自分には見えなかった自分を知ることになり、そして、そのことが自分には絶対にできないことが相手との協力によって、可能となるばかりでなく、意欲的に未知な世界への挑戦となることなど、すべてが今までの経験をはるかに越えた生活を体験するようになるという男女不平等それ自体の自然の原理は同時に彼の教育論の根本理念ともなっている。つまりルソーの教育論は、彼の全思想の本質を教育に集約した男女結合の教育論というべきである。したがって、家族を増やし複雑な家族関係のなかで、人間性を豊かに培う家庭教育が人為をこえた教育力を発揮するのである。このことについて、ルソーは「あらゆる社会の中でもっとも古く、またただ一つ自然なものは家族という社会である。」(社会契約論 P.16) と述べ家族の人間関係と家族の営みを教育の原点としている。

この男女の結合による人生の無限の可能性の追求は、男女の自然本性への解放である。そこで、男女の結合関係について、ルソーの見解の深さとその論理の展開を見ることにする。「両性の結合関係は実に感嘆すべきものである。この結合から無形の一個の人格が生まれる。女性はその眼であり、男性はその腕であるが、しかも、女性は男性から何を見るべきかを教わり、男性は女性から何をなすべきかを教わるというような互いに依存しあう関係を持っているのである。もし女性が男性と同様にものの原理を窮め得、男性が女性同様細かなことに気をつく心を持っているならば、両者はいつまでも相互に独立していて、永久に不和の状態で暮らし、両者の結

合は存続し得ないであろう。ところが両者を支配している調和が、いっさいを共通の目的に向かわせているのである。どちらがよけいにこれに貢献しているかはわからない。どちらも相手の力に押されているのだ。どちらも服従し、しかも両方ともに主人なのである。」(p.415) ルソーの自然的男女不平等観は男女の人間形成論でもある。「両性の結合関係は実に感嘆すべきものである。この結合から一個の人格が生まれる。」とは男女がその結合関係で初めて人格的人間になれるということである。したがって、男女の結合関係がなければ、また結合関係にあったとしても「もし女性が男性と同様にものの原理を窮め得、男性が女性同様細かなことに気をつく心を持っているならば両者はいつまでも相互に独立していて、永久に不和の状態で暮らし、両者の結合は存続し得ないであろう。」と、自然の男女が自然から先天的に付与されている各自の特性を、男女の協力関係と自然の教育とで内面に人格を形成しなければ人類は滅亡するであろうと、ルソーは警告しているのである。

ルソーのこの自然的男女不平等論は、「両者を支配している調和が、いっさいを共通の目的に向かわせているのである。どちらがよけいにこれに貢献しているかわからない。どちらも相手の力に押されているのだ。どちらも服従し、しかも両方ともに主人なのである。」と述べている。そしてルソーは男女の自然的特性から、男性には女性が、女性には男性がなければ人格的人間として実存できないことになる。と男女の差異と不平等が男女の自然の本質的特性であるがゆえに尊重され高度に生かされなければならないことを強調している。したがって、ルソーの男女不平等観は男女平等という男女相互尊重の人間観の中心思想をすべて、自然的男女不平等論は内包しながらも、なおそれをはるかに超越した男性と女性の自然の特性を男女の結合によって、男女には存在しない新しい能力を積極的にはぐくみ育てる自然を原理とする宏大な人間教育の思想を樹立しているのである。

2. ルソーの感じやすい心と自然観

これまで、『エミール』を一貫して貫く、ルソーの自然的男女不平等観と女性教育論について概観してきたのであるが、その中心思想は自然である。彼は自らの生涯をかけて自然を絶対なるものと直観し、人間の内の自然を自らの内面にはぐくみ、自分の生き方を自らの内面的自然観に求めている。ルソーは『エミール』の冒頭で「創造主の手から出るときは事物はなんでもよくできているのであるが、人間の手にはわたるとなんでもだめになってしまう。」と『エミール』の全篇を貫く人間存在とその人間形成の根本原理を自然の教育に求め、その自然教育論を明確かつ表徴的に論述している。このことはルソーが人間存在の根源と人間教育の原理である創造主を、神をも包み込む偉大な自然として、自らの内に宿す内面的自然で捕らえているからである。

また、ルソーの『社会契約論』の第一章の冒頭には「人間は自由なものとして生まれた。しかもいたるところで鎖につながれている。自分が他人の主人であると思っているようなものも、実はその人々以上にドレイなのだ。どうしてこの変化が生じたのか？ わたしは知らない。何がそれを正当なものとしうるか？ わたしはこの問題は解きうると信じている。もし、わたしが力しか、またそこから出てくる結果しか、考えに入れないとすれば、わたしは次のようにいうだろう——ある人民が服従を強いられ、また服従している間は、それもよろしい。人民がクビキをふりほどくことができ、またそれをふりほどくことが早ければ早いほど、なおよろしい。なぜなら、そのとき人民は、支配者が人民の自由をうばったその同じ権利によって、自分の自由を回復するのであって、人民は自由をとり戻す資格をあたえられるか、それとも人民から自由をうばう資格はもともとなかったということになるか、どちらかだから。しかし、社会秩序はすべての他の権利の基礎となる神聖な権利である。しかしながら、この権利は自然から由来

するものではない。」と、自然は人間の創造する社会をはるかに超越した絶対なるものであることを、ルソーは内的自然で認識して自らの思想の根源として、独自の社会観を樹立している。

したがって、ルソーの自然とは現代社会で用いられる自然の利用、自然の征服というような人間対自然の関係で捕らえる自然科学的思想とは、全く次元をこととする思想であるというより哲学である。要するに、彼の自然は、自分（人間）と自分（人間）の外にある自然との関係ではなくて、自分（人間）と自分（人間）の内にある自然との関係である。つまり自分の内に自然があるという事実の認識である。

だから、ルソーは自分が人間の自然に帰るにはどうしたらよいのかを、また人間の自然とはいかなるものなのかを求める思想生活を、『エミール』の執筆を通して具体化したのである。ルソーが「自然に帰れ」といったのも、人間の自然に帰れという意味である。彼は人間の自然を誰れよりも強く、敏感に感じ、自分が内面的に感得した自然を、自らの自然とも、人間の自然ともして内面化していったのである。この自然観はルソーの思想を既成概念から解放し、人間生活のすべてにわたって、いつも新鮮な感覚と限りなく自由な思索生活を自らに保障することになったのである。したがって、彼は自然を中心思想として、人間の生き方及び人間理解の根源的絶対性を自らの自然観に求め、自らの内的自然を外的自然との対照において深めるその原理を自らの教育論の根本思想としている。そこで、ルソーが『エミール』の教育論において、自然を根本思想としているその自然とは、また彼の自然観とはいかなるものであるのかを考察してみることにする。

ルソーの教育に対する関心は自分の人生経験とその人生が形成した自分の人格への追憶と感慨とそして反省が、たえず自分が自分を教育するとしたら、かくありたいとの願いを深くしながら、その教育の構想を増幅し思想化していったのである。彼は「十ヶ月たって、わたしは病弱な子として

生まれた。わたしが生れたために母は死んだ。こうしてわたしの誕生はわたしの不幸の最初のものとなった。」(告白第1巻 p.13) と自らのおいたちが母親の生命を失わせ、自らも自らの誕生が不幸の最初となったことを、無念と悔恨の思いで綴っている。彼は母親を知らないがゆえに母親の愛をも知らない孤独な生涯を通して、ひたすら母性にあこがれ母性の愛を求めつづけている。したがって、彼は多くの女性との交際で愛を追求しているが、その愛の深層はつねに母性の愛を求めての遍歴であるように思われてならない。なかでもヴァランス夫人とテレーズへの愛には、多分に母性の愛をたずね求める彼の内面の姿を見る思いがするのである。

ルソーがたずね求めた母性の愛は、彼が世間の多くの母親たちの吾が子への愛を見るにつけ、また彼が多くの女性との交際で愛をはぐくんでも、所詮、得られるものではない異質の愛であることを、彼は実感したにちがいない。というのは、母性の愛とは母親と子どもの間にあるもので、子どもは母親との生活で母親の愛をいとも自然に内面化することによって、母親の愛を感じないものであることをルソーの「感じやすい心」は感得していたからである。まして、ルソーは自分の両親の激しい情熱的な恋と結婚に至る試練が「もう二人には生涯愛しあうしか道はなく、それを誓った。そして天意は二人の誓いをまっとうさせた。」(告白 p.12) と述べているように、そこに理想的な夫婦愛を見るとともに、両親に絶対な信頼と尊敬を抱き、誇りとしているのである。だから「父がどうして妻をなくした悲しみにたえたか、わたしは知らないが、とにかく一生なぐさめられなかったことはよく知っている。父はわたしを母の身がわりと考えていた。しかもわたしが彼女を彼からうばったことは忘れえなかった。彼が溜息をつき、身をふるわせてわたしをかたく抱擁するとき、にがい後悔が彼の愛撫にまじっていることを感じぬことはなかった。だから父の愛撫はよけいにやさしくもあった。『ジャン=ジャック、母さんの話をしよう』と父がいうと、『ええ、お父さん、また泣くんでしょう』とわたしは答えたものだった。これをき

くだけで、父の眼には涙があふれた。『ああ』とせつなそうにいう。『母さんをかえしてくれないか。お父さんをなくさめておくれ。母さんがわたしの心につくって行った穴をふさいでおくれ。おまえがただわたしの子だというだけだったら、こんなに可愛いだろうかしら？』この母をなくしてから四十年後に、父は二度目の妻の腕に抱かれて死んだ。しかし、口に最初の妻の名をよび、心の奥にはわたしの母の面影をうかべていたのだ。」(告白 p.13) と述べていることから明かなように、妻をなくした父と母を失なった子どもとが、共に妻であり母であるベルナールという美貌で聡明でそして貞淑な女性を、偲びなくさめあうのである。そして、父と子はそれぞれ自分自身の内面に生前の妻であり母である女性ベルナールの全人格とその愛を深く内面化して、自らの人生の精神的支えとも道づれともしているのである。したがって、ルソーは亡き母を父と共に偲ぶとき、より自然に精神的世界を同一にすることのできる共感を、どんなに誇りと思い、父への信頼と尊敬とを深くしたか計り知れないものがあつたにちがいない。

「わたしに生命をあたえてくれたのは、こういう人たちであつた。天が彼らにさずけた性質のうち、感じやすい心、この一つだけをわたしにつたえてくれた。この心は父母には幸福のたねだったが、わたしの一生ではあらゆる不幸のたねとなった。」(告白 p.14) ルソーが両親を誇りに思えば思うほど、彼はこの両親のもとでの家族としての家庭生活をどんなに切実に望んでいたかを思うにつけ、ルソーが「感じやすい心、この一つだけをわたしにつたえてくれた。この心は父母には幸福のたねだったが、わたしの一生ではあらゆる不幸のたねとなった。」と述べていることから、ルソーが両親との生活をどんなに望んでも、また、それはいかなる方法でもかなえられない宿命であると知りながらもあきらめきれずに生涯、心の深い傷として悲嘆と慟哭の人生を歩まねばならなかった。そしてその不幸を、なお一層不幸にしたものは彼が両親からさずかった、「感じやすい心」であるが、それを、彼がわたしの一生ではあらゆる不幸のたねとなったと慨嘆

する根底に、自然の内面化と人間の自然性を洞察する彼独自の内面的自然観がいつとはなく自然にはぐくまれていったにちがいない。

したがって、ルソーの「感じやすい心」は彼の自然に対する認識を、神の啓示ともして直観することとなって、自らの生き方の中心思想として自然の内面化を究極まで内面化して、自らの人生の哲学とも、日々の生活の指針ともして、内なる自然を絶対化していったにちがいない。そこで、ルソーの数奇な人生は、彼に自らの人生とその人生が形成した自らの人格への追憶と反省が、たえず、自分が自分の教育に望む教育はかくありたいとの思いを募らせ深くして、自分自身のための理想的な教育を時に夢想し時に構想していたにちがいない。それは今となってはとりかえしのつかないことで、どうにもならないことであればあるほど、彼に教育に対する夢と理想を追究させずにはおこななかったと想像されるのである。

その教育とは、平凡な家庭に自然に生まれた自分が、健康で愛し合う両親のもとでけがれない自然のままの自分が自分として、保護され、自然の発達にしたがって、自分らしく自由に学びながら、自分が自分の人格を自分らしく形成する自然の教育である。そして、自分を教育する自分の最良の理解者としての教師に対しては自分の自然の成長が尊重されるように、自然の教育を理念として社会の習慣や偏見やそして既成の価値観にとらわれることなく、自分の自然の発達と自由な自己活動を何よりも大切に保護して、できるだけ大人たちが自分を教育しようとしないように配慮すると共に、すべてにわたって自分が自分の意志で学ぶことができるように、環境を整え援助する自然の中での自然の教育を求めている。また、師弟は人間理解を深め合い、常に自らの内的自然を養い、そして自然の人間であるように無理なく自然に伴に在ることを教育の根本思想として高め合うのである。

ルソーは「感じやすい心」で自らの人生を懐古し反省することによって、自分を見つめなおし人間には教育がいかに必要であるかを、自らの人生を

通して実感し生涯をかけて思索しつづけていたので、人間にとっての教育の価値と必要性を誰よりも深く認識していたからこそ、「植物は栽培によって形成され、人間は教育によって形成される。」（1巻 p.14）と述べているのである。この人間と植物の関係は、彼にとって深い意味を有するよう思われてならない。植物は発芽に当って傷を受ければその後の成長に大きな影響を及ぼすことを、自分自身に見る思いであえて植物を例としたように思われてならないからである。そして、人間の一生で自然そのものともいえる子どもの時代の教育に、最高の価値を与え、子どもが単に大人の縮図ではないという認識から、その教育に強い関心と理解とそして保護の必要を示している。「もし人間の最初が子どもの状態でなかったとしたら、人類は滅亡していただろう。（中略）わたしたちは弱いものとして生まれ、力を必要とする。わたしたちはまったく無一物で生まれ、助けを必要とする。わたしたちは愚鈍なものとして生まれ、判断力を必要とする。生まれた時には持たないで、成長するにつれて必要となるいっさいのものを、わたしたちは教育によって与えられるのだ。」（p.14）との乳、幼児期の教育の必要性を、ルソーは人間の成長段階とその課題を直視して、人間の一生という誕生から死への道程の冷厳な事実のうえに立って今なさねばならない自然の教育について述べている。このことは有限の生命に対する畏敬であり「人間の自然」を尊重する「自然の教育」の必要性の根本的思想である。

ルソーが、乳、幼児期の子どもの実態をかくも深く内外にわたって理解し、その教育の方法を人間一生の展望に立って適切に「成長するにつれて必要となるいっさいのものを、わたしたちは教育によって与えられるのだ。」と述べていることは、彼の人間に対する関心と観察が尋常でないことを示すものであるが、同時に彼のおいたちもこのことについて関係があると思われる。母親のいなかった彼は、生後父親イザークと生活した10年間は彼の生涯を通して最も幸福な日々であった。父親のほかに父親の妹で

ある親切な叔母シュザンヌ、女中のジャクリーヌ、そのほか親戚や友人や隣人などが母のない彼に親切にしてくれたことは、彼に人間の乳、幼児期がいかにかに人生にとって、またその教育がいかにかにたいせつであるかを感得させたにちがいない。

したがって、ルソーは人間の乳、幼児期の子どもがどんなに積極的に学習するかまた、無心で自然な学習意欲とその能力を深く知って理解を深めていたからこそ、教育の本質とその純粹性をこの時期の子どもの自然性に求めていたのである。この乳、幼児期の成長の実態は、彼に人間の成長の自然性が泉のごとく無限に生みだす、その年齢でなければ表現しない発達の特徴の多様性を捉えさせ、自然の発達とその意欲を妨げることのない自然の教育を構想せしめたにちがいない。だからこそ、人間の成長の段階に最も適切な教育の機会を、それぞれの個人の自然の発達に即して対応する自然の教育を主張したのである。そして、その教育を「自然によって、また事物によっておこなわれる。わたしたちの機能や器官の内部的発育は自然の教育である。この発育をどう使うかを教えるのは人間の教育である。そして、わたしたちの五感にふれる物象について自分で経験するのが事物の教育である。」(p.14)と述べている。

ルソーはこのように自分が教育されたならば、自分の人生が変わっていたであろうことを、全く想像しなかったりまた考えなかったわけではないと思われる。だから、彼はたえず自らの性格の特徴である「感じやすい心」でどのような場合でも自分を深く見つめ、自分が教育されたいと切実に願望する教育を思索し、その構想の具体化に人生をかけて努めていたにちがいない。そしてまた、自らが構想した自然の教育で自分が教育されたならば、親から授かった「感じやすい心」は、人間の変容となって、自分の人生であらゆる不幸のたねとなることはなく、幸福へと転換させたにちがいないと確信していたように思われてならない。たとえ、彼の人生が結果的に不幸であったと彼自身が認めたとしても、彼は天が両親に与え、両親が

自分に伝えてくれた、ただ一つの「感じやすい心」を真実不幸のたねと思うはずはないどころか、その心を彼が両親を敬愛し誇りとしていたことから、自分にとって唯一の両親からの愛のあかしとしての形見とも、天賦の才能ともそして個性とも思い尊重していたにちがいない。だからこそ、「感じやすい心」を、自らの人生の創造の原動力として、高度には生かすと共に、それを自らの内面に自らが願う理想的な自然の教育によって、教育された幸福な自分を、色あざやかに描がきあげたのである。それが書物としての『エミール』なのである。

したがって、この「感じやすい心」と「不幸のたね」とは、彼の逆説であって、この「感じやすい心」こそが、彼の精神的支柱であったことにはまちがいないと思われてならないのである。そうでなければ、ルソーのあくなき人間探究と人間教育への関心とその思想が、彼の不幸なおいたちと数奇な人生が、そのみでこのような偉大な自然の教育を構想させるはずはない。彼はいつも「感じやすい心」と両親の愛とを重ね合わせて、自らの数奇な人生を糧として理想的自己教育を時に夢想し、時に構想しながら生涯をかけて思索し深化したからこそ、彼は自然を根本思想とする自然の教育を教育書としてまとめあげ完成させたのである。『エミール』が教育思想史上、画期的な教育学書であるということと、発想、内容、形式共に特異な性格をもちながらそうであればあるほど、普遍的であるのは彼が自然の真随を窮め、自分の内面に自然を発見し自分の自然として内面化したからである。この彼の教育に対する関心とその教育観は、ルソーの「感じやすい心」が自らの生涯をかけて捉えそして思索のはてに確立した偉大な所産である。だからルソーが、『エミール』を執筆しようとした直接の動機は、『告白』に見られるように、ある時、シェノンソン夫人から息子の教育について意見を求められたことにあるとはいえ、しかし、事実上は彼が既に自然を中心思想とする教育論の構想をまとめあげ、いつでも執筆できる態勢を整え、時機をうかがっていたからにちがいない。それほど彼の自

然の教育を中心思想とする教育観とその構想は円熟の極に達していたのである。たしかに、教育問題に対する関心は以前から強く心に秘めて構想を練っていたことは明らかである。それは『告白』で、『エミール』を「二十年間の瞑想と三年間の労作の結果」としていることから事実である。

したがって、『エミール』の序文でルソーは、現下の教育とその教育に対する教育論のすべてが、反対と批判のみで改善について実際的方法の提案が皆無であることを「わたしは、よい教育がたいせつだということについてはあまり語るつもりはない。また、現在おこなわれている教育のやり方が悪いものだということを証明するためにくどくどいうこともやめよう。そういうことは、わたしより以前に、数えきれないほどたくさんの人たちがしてきたところだ。それに、わたしは、誰でも知っていることがらで一卷の書物をうずめるようなことはしたくない。わたしは、ただ、つぎの一事だけを指摘しておこう。すなわち、すでにおこなわれている教育の方法に反対を叫ぶ声だけはあるが、それをどう改善するかという実際的方法について思いきって提唱するものは誰ひとりないということである。」(p.7)と、今日の教育が不毛で空虚であることを、批判するのみで改善への提案のない教育論は教育の破壊であると厳しく指摘している。そして、ルソーは今日の教育の良否について論ずること自体、無意味であると無視している。そして、人間教育の実践と改善への建設的な教育書の見当らないことを嘆いている。

そこで、ルソーは自らが自らの人生をかけて追究してきた教育論について、「人間形成の技術はいまだにおろそかにされたままだ。だから、わたしの取り組んでいるテーマは、ロック (John Locke, 1632~1704) の著書くらい、誰もほとんど手をつけていない。それで、わたしが、いま、いちばん心配していることは、わたしのこの著書以後もまた同じようなことになりはしまいか、ということである。」(p.7) からこそ、自分の自然の教育はまさにその問題、つまり、ロックの『教育に関する考察』以来いまだまっ

たく論じられたためしのない教育の本質的問題についてであり、そして、発想の転換でありその改善であるから、今日の教育の中心課題として論ずるに時機と価値を有するものであると、彼は自負している。

ルソーは『エミール』を執筆するにあたって、プラトン、ストア派の思想家、モンテーニュ、ラブレイ、フェヌロン、アベ・ドウ・サン・ピエールなどととも、ロックから特に最も強い影響を受けている。その影響とは教育こそ、人間の中に大きな差異をもたらすものであるという、人間にとっての教育の必要性と人間教育としての教師対生徒の人間関係の重視とは、公教育制度や学校教育は問題にすることなく、人間形成は家庭教育を中心とするという人間主義は当時の学校教育に対して否定的であった。したがって両者ともにその教育書において、教師対生徒の人間の成長が心理学的、哲学的分析を中心とするものであることが共通の特徴である。すなわち、子どもを主体とする児童中心の教育であるから、子どもの理解から始まる教育を教育理念としている。したがって、ルソーとロックは実質的に見解が一致していると考えてよいと思う。ただ、ルソーがロックに反論している個所も多く目につくが、それは言語の問題で思想的にはその本質を同一にしている。それと、ルソーは教育を根本から再考しなければならないと考え、教師と生徒の精神的理解とその深化を重点的に研究し生徒を人格として尊重しその人格形成に意を用いていることでもロックと共通している。しかしこの教育の根本問題を問う自著が社会的に無視されてしまうのではないかと恐れているのは、内面からの人間形成すなわち自然の教育に対する彼のそうはさせじとの信念と自負の強さの現われである。

そこで、ルソーは自らの自然の教育についての基本的理念として、子どもの理解の深化と子どもの自然的発達の尊重と、そして子どもの学習能力及び自発的自己活動の尊重とその開発の三点を挙げている。そして、子どもの理解と認識について、自分と世間の大人たちとの根本的ちがいを次のように述べている。「大人は子どもというものをまるで知らない。だから、

大人が子どもについて現在持っているようなまちがった考えをもとにして進むならば、進めば進むだけまちがった方向にいつてしまうだろう。最も賢明な人たちでさえ、大人が知らなければならないことだけに心をうばわれていて、子どもたちが現在どんなことを学ぶことのできる状態にあるかということを考えてみようとしな。かれらは、子どものなかに、いちずに大人を求めている、大人になる以前に、子どもがどんなものであるかを考えることを忘れている。この点こそ、わたしが、最も心をうちこんでした研究である。」(p.8)

ルソーの子どもを理解する姿勢は自分自身の理解から始まっている。彼の自己認識は自らの「感じやすい心」を自らの精神性の中核に据えている。したがって、たえず自己に懐疑的で厳しく反省して既成概念から自分を解放して、自らを自由人へと変容させようとたえず努力している。そして、子どもを人格として見ると共に理解を深めるといった自然で自由な観察態度を、自らの内面に養いその確立をはかっている。彼は自然尊重の精神で、人間のなかで最も自然に近い自然そのものともいえる子どもを尊重し、深い関心をよせている。この人間的態度は、「大人になる以前に、子どもがどんなものであるかを考えることを忘れている。この点こそ、わたしが、最も心をうちこんでした研究である。」と述べているように、世間の大人たちが子どもの自然発達の神秘性と内面的自己形成の精神的活動に、関心を示すことなくまして、考えてもみようとしないことは、ルソーにとって、予想だにできなかった驚ろきであったにちがいない。だから彼は、自分と世間の大人たちのちがいを知れば知るほど、子どもの研究に全力を注いだのである。それほど彼の人間性は豊かであったからこそ、彼に子どもが大人の単なる縮図でないことを直観させ、子どもへの関心を一そう深めさせていったのである。

したがって、彼の子どもを理解するための観察態度は、きわめて慎重である。子どもを理解するとは、子どもの内外の自然の発達の神秘性に触れ

ることであるから、敬虔な態度で臨み、子どもの立場で理解しなければ子どもを正しく理解することも、その理解を教育に役だてることもできないことを、彼はよく知っていたのである。このような態度で子どもを観察し理解するならば、そこには新鮮な生命力と自然の発達とその子ならではの個性と能力などが、発見され理解されるばかりではなく、子どもが積極的に自らの個性を顕著にそのような人間的大人に向って表現するのである。したがって、大人の子どもの理解は、子どもの大人理解でもあるから、子どもと大人の心の交流がなければ人間理解も教育も成立しないことから、教師と生徒の相互理解があって初めて生徒理解が深まることを、ルソーは自らの自然の教育の基底としているのである。まして、ルソーは「子どもの発見」では、教育学の発達にとっての功労者である。なぜならば、彼の「子どもの発見」は、子どもの心理や生理に関する客観的、科学的な認識をはるかに超えた自然本性の理解であり、すなわち形而上学的な人間尊重の本質（精神）の探究であるからである。思うに、彼こそが、子どもの救世主であり人間教育の始祖ともいふべき偉大な存在なのである。

したがって、ルソーは、自然の教育についての方法を次のように述べているのである。「それは、たとえ、わたしの教育方法がすべて空想的であり、まちがったものであったとしても、なお、わたしの観察は依然としてりっぱに役に立つようにという考えからである。どうすべきかということについては、わたしがひどくまちがっている場合もあるかもしれない。しかし、教育しなければならない対象がなんであるかについては、わたしは正しく見とどけていると信ずる。だから、あなた方はまず、あなた方の生徒をもっとよく研究することからはじめなさい。なぜなら、あなた方が生徒をまるで知っていないということのごく確かなのだから。さて、こうした見地からこの本を読んでいただければ、まずあなた方に全然ためになるところがないなどということはありませんはずだ。」(p.8)ルソーは自然の教育が対象の理解から、対象に最も適した教育課程と教育方法を見出し、対象であ

る子どもの個性にかなった教育活動が、子ども自身によって学習されるならば、子どもの成長は、子どもの自由な意志によって、最も自然にかたよりのない円満な成長を遂げることを確信している。だから、子ども自身の自発性と生活経験を損うことのないよう、その理解についての観察に細心の配慮を払うように指摘している。特にその子どもの自然本性については。

そして彼は自らの自然に即した自然の子どもの理解が教育そのものであるという教育理念に絶対の自信をもっているからこそ、「たとえわたしの教育方法がすべて空想的であり、まちがったものであったとしても、なお、わたしの観察は依然としてりっぱに役立つようにという考えである。」と空想どころか現実の子どもを自然の目で見つめ観察することによって、子どもの自然性を発見し理解してこそ教育は対象を得たことになり、ここに教育は初めて成立すると、子どもから始まる教育に確信を得たことを、空想的であり、まちがったものであったとしてもといった謙譲語と逆説的表現で表明したことは彼の盤石の自信を子どもの自然性の発見においていることを示すものである。だから、彼は教育の原点は自然の子どもにあることを次のように述べている。「わたしがひどくまちがっている場合もあるかもしれない。しかし、教育しなければならない対象がなんであるかについては、わたしは正しく見とどけていると信ずる。」ルソーの子どもの自然性の発見とその教育が自然の教育によってなされなければならないという人間観、自然観、教育観の統合的思想は、彼をして思わず、「わたしがひどくまちがっている場合もあるかもしれない。」と言わしめるほど、自信と陶醉に満ちていたからである。この自信は彼の傲慢といった浅薄なものではなく、神の啓示ともいえる自然認識に立脚した彼の自然の教育という思想があつてのことではあるが、子どもの自然本性を理解する彼自身のたえざる自己教育こそ認識すべきである。したがって、自然の教育がその子ならではの内的自然性を観察し理解することを絶対条件とするならば、子どもの内的自然性の神秘をほんの僅かでも見たり触れたりする恐れに敬

虔な態度をもって臨まなければならない。このようにして自然の教育が人間的におこなわれるならば、教育方法が空想的であろうと、ひどくまちがっていても、その教育は子どもの成長に関係するすべての生活に役立つばかりでなく、子どもが内面から蘇ることになることから、その成果は自然本来の成長をもたらすのである。だからこそ、ルソーは子どもの側に立つ教育がいかに大切であるか、そしてまた、それこそが自然の教育であることを主張しているのである。そして「あなた方はまず、あなたがたの生徒をもっとよく研究することからはじめなさいと。」親や教師すなわちすべての大人たちに、自然の子どもの発見とその尊重は自らの自然への畏敬と敬虔な精神があって初めて可能であることと、その教育が人間的な愛情によるものであることを説いている。「こうした見地からこの本を読んでいたならば、まず、あなた方に全然ためになるところがないなどということはありません。」と自然の教育が現在の子どもの自然の子どもとして活性化し子ども自身が自分本来の成長を意欲的に成し遂げることによって、不幸から脱却し親や家族をも幸福へと導くことを広く知らしめんとしている。ここにルソーの限りない子どもへの愛を見ることが出来る。このルソーの子どもへの愛こそが彼の自然の教育の基盤をなすものである。

したがって、ルソーの自著『エミール』に対する愛着と自信のほどは、その根本思想が自然の原理であり、その内容が神の啓示ともいべき自然の子どもの発見に基づく教育で、自然と人間を愛で語り尽くしていることから、人間探究の書として自信と確信に満ちているとはいえ、それでもなお彼は本書が読者に容易に理解されないであろうとの危惧の念を抱いている。そして、本書に対する読者の最もとまどい疑問に思うところと、著者である自分に対する批判攻撃の箇所である自然性について具体的に示すとともに、それが、彼自身の根本思想でもあることを明確にしている。

「この本の体系的部分と呼ばれるようなものについては、ここでは、自然の歩み以外の何ものでもないのであるが、おそらく読者が最もとまどうの

はここであろう。そしてまた、わたしが攻撃されるとしたら、きっとこの部分についてにちがいない。」と述べているのは、ルソーが自らの全思想を「自然の歩み」のこの一点に集約して、いかに心血を注いで思索を深めていたかのあらわれであるから、彼は読者にこの中心思想について、どんなに切実に共感と理解を求めていたか計り知れないものがある。ルソーは本書の執筆以前から自然の教育を自らの多難な人生から構想し、教育論としての思索を深めていたので、本書の執筆を通して、ますます本書の体系を「自然の歩み」そのものに集約統合し、自然の原理に即した自然の教育論を現下の多様な教育とその教育論を超越して、より鮮明に自信をもって描きあげたのである。したがって、読者の本書に対する関心ととまどいは、そのまま「自然の歩み」すなわちその自然観に即した教育論にあることは当然である。と予想し、それが読者にとまどいか、または共感かのいずれかを与えずにはおかないことを、すでに洞察しているのである。だからこそ、彼は攻撃されるとしたならば、きっとこの部分であるにちがいないと予想を立て、そして、このことが自らの自然観に対する自信と確信を一そう深めさせたがゆえに、「攻撃する人の方が正しいのかもしれない」と、余裕をもって応じる柔軟な姿勢で正対しているのである。

彼のこの自然観に対する思いは、自分にとってもそうであったように、他の人々にとっても、自然と人間の関係は人間の最高の関心であるから、いつの日か理解を深めないではいられなくなる魅力のある命題であることを洞察している。そして、ルソーは、「この本の体系的部分と呼ばれるようなものについては、ここでは、自然の歩み以外の何ものでもないのである。」とさりげなく自らの自然観について述べているのは、彼の自然観がすでに完全に自分のものとして、本質化され内面化されているからである。また、読者のなかにはルソーでなければこのような哲学を、このようなすみきった純粹でけがれない適確な表現はなし得なかったであろうと、その説得力に共感を覚えるものも多いのである。したがって、ルソーが自

らの自然観を「自然の歩み」に帰着する道程は永かったのである。彼の苦悩に満ちた人生が、人間と自然についての鋭い観察で思索を深め、人間と自然の関係を内面化して、限りない愛で人間と自然と自分を一体化したからこそ、自然の歩みを教育の体系とする教育理念に、到達することができたのである。

ルソーの「自然の歩み」についての読者のとまどいについて、彼は解説的な解答で応えようとはしていない。「どうしたらよいというのだ？」(p. 8)と読者のとまどいについてどう答えればよいのか、まず読者の疑問の本質が何であるのかを理解しようと努めている。そして読者の疑問が大別して二つあるとして、その一つは「自然の歩み」に対する読者自身の物の見方、考え方からの理解という主体的なもの。その二つは、「自然の歩み」そのものの解説ないし具体的解答を求めるという読者自身の依存的なものとしている。そこで読者の第一のとまどいには、「わたしが書物を書くのは、他人の考えをもとにしてするのではない。もっぱらわたし自身の考えをもとにして書いているのだから。わたしのものの見方はひと様と同様ではない。」「自分に他人の眼を与え、他人のものの考え方を自分に押しつけることが自分でできるだろうか？ わたしにせいぜいできることは、自分の意見にすっかり溺れてしまわないこと、われひとり世に賢しとうぬぼれないことだ。」「わたしは、わたしの心にうかぶままを、そのまま正確に述べるだけなのである。」(p. 8)とルソーは自分自身の主体性と自分の直観が捉えた問題と、その解決がすべて自分の物の見方、考え方であり主体的自己活動であることを述べ、他人のそれを借用することをしないから、自分の考えを正確に述べるにあたって、いつも謙虚でなければ、なお人の意見や自分への批判には素直に耳を傾むけなければと心がけていると、思索する人としての自分の姿勢を明らかにすることによって読者自身の思考を促している。また、二つ目の読者の「自然の歩み」に対するとまどいには、読者自身の問題として自らが解決することによって、初めて自分としての納

得が得られることを、読者の自己活動に求めている。「時として、わたしが断定的な言い方をするとしても、それは、そのまま読者に押しつけるためではない。わたしの考えているとおりに読者に話しかけるためである。」(p.8)と、どこまでも読者の主体性を尊重し、その識見を信じているから、断定的ないい方や考えていることをつつみかくすことなく話しかけることができるのであると述べている。彼は自分の意見が相手によって、批判されたり否定されたり、そして理解されたり時に自分の考えよりもはるかに高い次元で理解されるなどのことがあることをよく承知している。そして、それがいずれの場合でも、その人々の自己活動が自然の法則にかなった自己の生かし方であるか否かに関係のあることを見ぬいている。だから、人間の自然性はそれぞれ個性的であるから、自らの個性を育てたいと思うならば「自然の歩み」にしたがって自らが自らを育てる自己教育以外に方法はないことを身をもって示している。したがって、ルソーが読者のとまどいに解答を与えるような愚かなことをするはずはない。それよりも彼は読者と自分の間に真実を求めようと、絶えず対話を求め願っている。

ルソーは「自然の歩み」を『エミール』の根本思想としている。彼のこの自然観に基づく教育論『エミール』は、自らの全生涯をかけて著わした著書である。しかし、彼の自信の著作も世間の認めるところではない。まして、彼の思想は第一論文『学問芸術論』(1750年)以来ずっと激しい非難にさらされてきたのである。したがって彼は「どんなにわたしが自分の意見を固執しないようにしているといっても、わたしの考えを世に問わねばならぬ義務を軽く考えるという意味ではない。なぜなら、わたしの意見がほかの人たちの意見と相反するそのものになる格率は、これはどうでもよいことではけっしてないからである。この格率こそは、ぜひともその真偽がはっきりしていなければならぬ重大事であり、人類の幸、不幸を左右するものであるからだ。」(p.9)と本書の自然の教育についての思想が正当に理解され評価されそして活用されることを強く切望している。そして、

彼は本書に対する社会の相反する意見に厳しく対決する姿勢を示し、人類の幸、不幸にかかわる本質的な格率であるから、その真偽をどうしても見分けなければならないと決意のほどを表明している。

そして、彼は本書が社会で評価され共感を得られるならば、子どもはこの教育によって幸福になることを確信している。「およそ、いっさいのもくろみというものには、たいせつなことが二つある。第一は、その計画が絶対によいものであること、第二に、容易に実行できる、ということである。第一の点については、計画がうけいれられ、実行にうつされるためには、その計画の有するよい点が事物の本質にあるならそれで十分である。たとえば、いまの場合では、提唱される教育が人間の心になつたものであれば十分なのだ。」(p.9)と本書が第一の点で、それ自体として絶対によいものであることは、その教育計画が教育思想の本質になつているからであると自信のほどを述べている。そして、そのことについては、本書の場合には以下提案される教育計画が人間に適したもので、なお人間の心情に十分になつたものであると断言できると、本書の教育計画とその内容が子どもの教育にいかにかわしいものであるかを強調している。第二の容易に実行できるという点については、「それは無数の事情によるものであって、この事情というものは、とうていきめてかかれるものではない。そして、そういう個別の応用はすべて、わたしの主題にとっては本質的なものではないから、わたしの計画にははいつていない。」と解答を避けている。しかし、本書の教育論が有用であることを彼は次のように述べている。「ただ人間の生まれるところならどんなところでも、わたしの提唱することは、それぞれできるだろうし、また、それを応用したならば、その人自身のためにも、他人のためにも、何よりもよいことをおこなつたことになるだろうということ十分なのだ。」(p.9)とルソーは本書の教育論の本質が、すべての人々の教育に適用されて、実行されるならばそれだけで最善の教育を受けたことになること、本書の教育の本質である自然の教育

について、絶対の自信を「もし、この約束をわたしが果たさないとすれば、むろんそれはわたしの罪だ。しかし、もしわたしがこの約束を果たしていて、しかもなおそれ以上をわたしに要求する人があるとすれば、それはその人がまちがっている。わたしが約束するのはそれだけなのだから。」(p. 9)と述べている。このことはルソーが自らの教育論を他のいかなる教育論よりも、その教育論においても、また実践においても優れているとの自負である。だから、彼は自らが提唱する教育が人間に対して実行されるならば、それは最善の教育がなされたことになることを確信している。したがって、彼は自らの提唱する教育が最善の教育にならないはずはないと断言し、自らの教育論が人々に最善の教育を提供することを約束している。

たしかにルソーは「自然の歩み」を根本思想とする自然の教育を『エミール』において展開している。そして、その教育論の根本思想である彼の自然観の自然は、ルソー自身が感得した自らの内面に存在する自然である。すなわち、人間の中の自然であり、人間の自然である。要するに自然の自然ではなく自然の人間化である。したがって、ルソーは自分の内面に感じた自然を『エミール』においてその教育全体に展開したのである。

ルソーが提唱する自然の教育が「消極的」であり、その教育学が同様に消極的性格を持つのは、すべての人間の自分の中の自然が積極的な自己教育となっているからである。だから、彼は自分の中の自然が自らの人格形成をより積極的に行うためにその教育は消極的でなければならないと、人間の中の自然を中心とする積極的自己教育論を主張し展開したのである。

3. 母親と家庭教育

ルソーの教育論『エミール』の序文の冒頭に、「この反省と観察の集録は順序もなく、ほとんど前後のつながりもないが、考えるということを知っているあるりっぱな母親のころにかなうように書きはじめたものであ

る。」(p.7)と記されている。この母親とはシュノンソー夫人(1730～1767)である。ルソーは30才の時パリに出て、その翌年デュパン夫人に紹介され、それ以後デュパン家に入入りして就職や生活など多くの世話を受けた。そのころ彼はデュパン家の秘書であるとともに、デュパン夫人の息子の家庭教師をもわずかな期間務めたことがあった。その息子の嫁がシュノンソー夫人である。『告白』第9巻のはじめに、この夫人に頼まれていた教育論を書こうと思ったとある。それが『エミール』執筆の直接の動機である。

しかし、教育問題の関心はずっと以前から強く抱きつづけてきたことは明らかである。『告白』では、『エミール』を「二十年間の瞑想と三年間の労作の結果」といっている。ルソーが認めている動機はまだある。ルソーは、テレーズとの間に生れた子どもを孤児院に入れてしまって自分で育てていないが、この行為に対する後悔が『エミール』執筆の動機の一つである。それとルソーの生いたちである。彼は母を知らずに社会の荒波にもまれながら成人した。彼の母の愛を求めてやまない精神的飢えが、つねに母性を理想化し世の母親を教師の理想としたことも動機の一つである。

したがって、彼は家庭教育の中心的存在である母親たちに、その教育についての基本的理念と母の愛が教育を浄化することを示している。特に女子教育について自らの男女論を基盤とした教育論を次のように述べている。

「男性と女性が、性格の点でも、体質の点でも同じように成り立っていないし、またそうなるべきものではないということがひとたび明らかになった以上、当然、両者は同じ教育を受けてはならないという帰結になる。自然の示すところに従えば、両性は相互に協力して行動しなければならないが、同じことをしてはならないのである。仕事の目的とするところは共通である。が、仕事そのものは違っている。したがって仕事を進める流儀も異なっている。自然の男性を作り上げる努力をしたあと、わたしたちの仕事が半端なものにしておかないために、この男性にふさわしい女性がど

んなふうには作り上げられなければならないかを見るとしよう。」(p.397)

ルソーは男性と女性の相違を性格と体質の両面から考察して、その性の相違を明らかにしたうえで、両者の教育が同じものであってはならないと、それぞれに最も適した教育の必要性を強調している。そして、男女それぞれの特徴を男性は女性に女性に男性に最もふさわしい人格をよりよく形成することが教育の目的であり、男女の協力の基盤をなすものであることを指摘している。そこで、その教育の意義を男性と女性は共に人生をより高い価値を目指して有意義に生きるという目的は同じであっても、自ずからその役割は異っているのであるから、両者がよりよく生きるための協力者としての資質の育成は、何物にも増して必要である。特に男女の教育はどんなに完全を期して、その人格の形成に努力しても完全とはなり得ない。それは男性にふさわしい女性がいなければ、男性の特徴を発揮することができないからである。そこで、男性の教育が男性としての男らしさとその特徴をいかに育成したとしても、それが半端なものとして途中で放棄すると同じような無様な結果にならないために、今こそ、この男性に相対するふさわしい女性の育成はどのように教育されなければならないかを考えないわけにはいかない。とルソーは女性の教育の重要性を強調すると共に、女性にふさわしい男性の教育があって、初めて自然の原理に即した男性の教育が成立することを指摘している。

そこで、ルソーは母親と父親すなわち世の人々に男性と女性の本質を深く理解することから教育は始まることを訴えている。その男女の本質的理解とは「常に正しい道に導かれたいと思われるなら、常に自然の指し示すところに従いなさい。性の特徴となっているものはすべて、自然によって確立されたものとして尊重しなければならない。」(p.398)と、男女の理解と自然の関係について述べている。そして、社会のまちがった男女観について指摘するとともに、自然によって創造された男女を尊重する精神がなければ、広い視野と深層での理解にはならないことを明確にしている。そ

これは「あなた方はたえず言う。女性には、男性にないこれこれの欠点がある、と。あなた方の慢心があなた方を誤らせているのである。それは、あなた方としてなら欠点かもしれないが、彼女たちにすれば長所なのである。もし、彼女たちにそれらのものがなかったら、何事もあまりうまく運ぶまい、それらのいわゆる欠点なるものが退化するのは防ぎなさい。が、それらを破壊することはしてならない。」(p.398) まさに、男性の女性批判の根源をなす慢心に対するきびしい指摘であり戒めである。したがって、女性理解は女性の立場に立つという愛情と謙虚さがなければ、男女の微妙な生活の綾を見失って男性のみならず、女性をも不幸に陥し入れることになる。男性と女性の協力は相互理解と相互の特徴を高度に発揮し合う人間的な関係であるならば、その調和と統一は愛と尊敬でなければならない。それがなければ女性の長所・特徴を破壊してしまうことになって、男女の精神生活は荒廃するばかりである。ルソーは男性の女性理解が愛と尊敬を失っていることに気付かない傲慢を嘆くと共に、同時に、女性の男性理解についても同様のことがらを指摘している。「女性たちは、女性たちのほうで、わたしたちが彼女たちを虚栄的で男性に媚びるものにしようと教育しているのだとか、彼女たちをいつまでもいっそう支配しやすいようにしておくために、たえず他愛もないことで彼女たちを喜ばすのであるとか、絶え間なく声を大にして叫ぶ。わたしたちが彼女たちの欠点だと非難することがらを、彼女たちはわたしたちの責任に帰するのである。なんと愚かなことだ！ では、いつから男性たちが娘たちの教育に干与したというのか？ 母親たちが娘たちを好きなように教育するのをいったい誰が妨害するというのか？ 娘たちには行く学校がない。たいへん不幸だとおっしゃる！ ああ、男の児たちにも学校などというものが、無かったらどんなによかったことだろう！ そうすれば、かれらはもっと賢明に、もっと立派に教育されるであろうに！」(p.398) ルソーは、女性の訴えに耳を傾けて、女性の社会的境遇を理解しようと努めているので、いたずらに女性を一方向的に

批判しようとはしていないことを前提として、彼の女性批判を理解していきたい。女性はたえず男性が女性を虚栄的で男性に媚びるものにしようと教育しているのだとか、男性がいつまでも女性をたやすく支配しつづけていくために、たわいもないことで女性たちを喜ばしているとか、と男性を批判しているが、女性は男性が女性の欠点を非難し指摘している事柄をすべて男性の責任に帰していることは、女性の男性批判として、余りにも一方的ではないかと、ルソーは女性の僻み意識に反省を促している。女性の能力は決して男性に劣るものではなく、女性には女性特有の能力と特権があることを主体的に認識して、生かしてもらいたいと強く願っている。というのは、女性の男性批判には男性の社会的自己中心性を鋭く突いている女性特有の感情のあることを彼が大切に暖め女性の立場でその苦悩に共感しているからである。したがって、前に述べたように彼が男性の女性批判は男性の慢心と傲慢によるものであると決め付けた人間性に関する致命的な指摘を、女性にはしていないことから、ルソーの女性観は女性の立場で女性の心情を理解しようとの内面的理解を心がけている。

まして、いつから男たちが娘たちの教育に参加したというのか。母親たちが好きなように育てるのを誰が邪魔をしたというのか。また、彼女たちには学校がない、たいへん不幸だ。男の児たちにも学校がなかったらどんなによかったことだろう。そうすれば、かれらはもっと賢明にもっと立派に教育されるであろうなどの彼の指摘は、母親及びやがて母親になるであろう女性への家庭教育中心の育児、教育に対する期待であり、母親にその責任を任せてこそ、学校教育では不可能な自然に即した個性尊重の愛の教育が可能であることを認めてのことである。まして、ルソーは学校教育に関心を示さず、否定的でさえあることを思うと家庭教育とその母親にどんなに期待していたかがわかるのである。だからこそ、ルソーは女性に自らの能力と特権を高度に生かす自覚をうながすために、「あなた方が彼女たちを教育したり、または、あなた方のお好みどおり教育させたりするのを、

わたしたちが妨げているのであろうか？」(p.398)と、女子教育をすべて母親の自由に任せておいたことは、男性が母親の教育を妨害したことであり、そして、それは、母親に何の責任もないことで、すべて男性の過失であろうかと、男性(夫)たちの女性(妻)への信頼と期待がまったく理解されていないことを嘆き、きびしく母親を批判するとともに、自主的な母親こそ、最良の教師であると母親の無限の教育力を母親たちが自覚して自らの主体的な女子教育の実践を彼は愛をこめて喚起している。

すなわち、男性の女性批判と女性の男性批判の矛盾が、それぞれの自我の独善と確執にあることからの解決をはかろうとルソーは、ここに思い切った提案をするのである。「よろしい！ では彼女たちを男のように育ててごらんなさい。男性はよろこんで同意するだろう。女性が男性に似ようとすればするほど、女性は男性に対する支配力を失う。そしてそのときこそ男性はほんとうに主人になるであろう。」(p.398)ルソーのこの提案は彼の男女不平等論を根底とするものである。現実社会で男女が織りなす生活は、両者の協力を必須条件としているがゆえに、きれいごとではすまされないのである。両者がより望ましい生活の創造に努めれば努めるほど、それぞれの役割に不満と矛盾を感ずるのは当然である。本来協力は葛藤なくして存在し得ないものなのである。「両者の相対的義務の厳しさは同じではないし、また同じであり得るものでもない。それゆえ、女性が男性のほうが不当不平等の優位にあると不満をいうならば、それは間違いである。この不平等は人間の造った制度ではない。あるいは少なくとも偏見の所産ではなく、理性の所産である。すなわち、自然は両性の一方の側、男性に子どもたちの養育の責任を負わせて他方との釣合いをとったのである。」(p.395)と、男女の不平等に立つ男女の協力、すなわち両性の本質的特徴の差異による協力が男女の生活を形成するものであることを強調している。「一家の和合を維持するために、彼女には、どんなに多くの優しい愛と心づかいが必要なことであろうか！」(p.395)と、男女の特徴の違いが

果す役割の偉大さを述べ、現象的な男女不平等から男女の内面の不平等へと男女観の視点を変えることを強く望んでいる。つまり男女不平等は自然的男女不平等であるからこそ、この社会において、男性はより男らしく、また女性はより女らしく成長しなければ、自然人としての人間の生存は確立されないと共に、男女の結合による生活も成立しないことをルソーは、いまだかつてない発想の転換で彼独自の自然的男女不平等観の確立のうえに、男女の人間としての自覚を強く求めている。すなわち、男性は自らの内面に自然の男である自覚を、また女性は自らの内面に自然の女である自覚をである。つまり、男女の結合は男女理解の再認識から始めることを訴えている。

したがって、男性（夫）は家族の安全な生活と子どもの養育に責任を負うとともに、女性（妻）には新しい生命であるその子どもの自然人としての精神の育成とその基盤をなす家庭経営を、全面的に無条件に託しているのである。だからこそ、母親たちに女子を男のように育ててごらんなさいとの提案は、男女の結合によって成立している生活のすべてを破壊することを意味する思い切った大胆な提案である。しかし、ルソーがこのような極端な提案をしたのも、女性の思慮深い心くばりと適確な判断に対する信頼と尊敬があつてのことである。それでも、ルソーのこの不平等観は封建社会の男尊女卑の思想ではないかと誤解されやすいのであるが、絶対にそうではない。彼の男女論は男女の差異を現象的に捉えたのではなく、その内面からの人間の中の自然すなわち人間の自然を自覚しての自然的不平等の認識なのである。つまり、自らが人間の自然を自覚したがゆえに到達した自然観に基づく、自然的男女不平等論なのである。

そこで、自然的男女不平等観に基づく教育についてのルソーの教育論は、自然の教育である。「両性に共通なすべての能力も両者に平等に分け与えられているのではない。が、全体としてみれば、両者の能力は相補い合っているのである。」(p.398)「女性のうちに男性の長所を養ったり、女性特

有の長所をなおざりにすることは、それゆえ、明らかに彼女たちには害をなしていることになる。」(p.399)とルソーは男女の能力の差異とその能力の相互補完に基づく教育を主張している。つまり、自然から与えられた男女それぞれの特性を生かし成長させることを目指す自然主義教育である。したがって、女性のうちに男性の長所を養ったり、女性特有の長所をなおざりにするような、自然の原理に反する教育を厳しく戒めている。特に、目前の利害打算に囚われ、社会現象に幻惑されて、刹那的、人為的な教育をすることは、女性の害となり損失となることを厳しく指摘し、そのことが同時に男性の不幸ともなることを強調している。

そして、ルソーは母親たちに自然の指し示す教育の原理について語るのである。「思慮ある母親よ、わたしを信じなさい。あなたの娘をけっしてりっぱな男性にしてはならない。それは自然を否定しようとするようなものだ。りっぱな女性にしなさい。そうすれば、必ず彼女は彼女にとってもわたしたちにとってももっと価値ある人となることまちがいなしと思ってよろしい。」このルソーの母親たちへの言葉が素直に母親たちに、理解されて受容され共感されるなどとは、彼自身思っていない。女性の男性観は不当不平等といった男性に対する不満と不信のあることを、ルソーはよく承知しているからである。そこで、男性の女性観と女性の男性に勝るとも劣らない崇高な自然的価値について述べ、そして、女性が天与の才能を一層向上発展させる女子教育について、次のように論理を内面化させている。

「こういったからとて、あなたの娘を万事に無知に育てなければならぬとか、家事だけに働くようにしなければならないとかいう意味になるだろうか？ 男性は自分の伴侶を召使いにしてしまうことになるだろうか？ 彼女のそばから社会の最も大きな魅力を奪うことになるだろうか？ 何事も彼女に見聞きさせず、知らしめず、隷属させることになるのであろうか？ 彼女をまったく自動人形にしてしまうだろうか？ 断じて、そうではない。自然はそんなことを望んではいない。だからこそ、自然は女性にかくも快

く、かくも繊細な才知を与えているのである。正に逆に、自然は、女性が思惟すること、判断すること、愛すること、認識すること、その姿の如く才知をも美しく養うことを望んでいるのである。彼女たちに欠けている体力の補いをつけ、わたしたち男性を指導するように自然が女性に与えているのは、まさにこういう武器なのだ。彼女たちは多くのことを学ばねばならない。が、ただ、彼女たちが知るにふさわしいもののみ学ばねばならないというだけなのだ。」(p.399)

ルソーの女性観は自然が与えた女性の能力と女性の社会的立場を、余すところなく正確に指摘して女性のまちがった自己認識と社会的評価に再考をうながし、本来の自分を取りもどさせて自分の中の自然を自覚させ深めさせようとしている。そして、男性は自分に最もよく仕えてもらうために女性を無知のままにして、利用しようなどとは断じて思うはずはない。と男性の女性への思いと要望を愛と情熱で披瀝している。そしてまた自然は女性が思惟すること、判断すること、愛すること、認識すること、その姿の如く才知をも美しく養うことを望んでいるのであるから、男性も当然内心からぜひそうなってもらいたいと切実に望んでいることを強調している。そして、内外共に美しい女性に男性が人間的に深く理解されるならば、この女性にふさわしい男性になるために、男性は自らの人格の完成を目指して意欲的に自己完成に努めることになることを女性が理解することを求めている。男性を指導するように自然が女性に与えている武器とは女性としての才能を磨くことであり自己完成への努力である。このことが男性を指導するということであって、それは両者の理解と協力と尊敬があって始めて可能である。

本論中のルソーの引用文は玉川大学出版部の世界教育宝典『エミール』 訳者永杉喜輔，宮本文好，押村襄。『告白』・『社会契約論』 桑原武夫訳 岩波書店